

伝え合う力をはぐくむ音声言語指導の研究

- 自己内対話を意識したインタビュー活動の実践を通して -

千代田町立千代田中部小学校 教諭 西川 哲也

要 旨

本研究は、伝え合う力をはぐくむために、対話能力の向上を図る指導の在り方を目指したものである。児童が自らの話し言葉を見つめ、改善できるようにするために、インタビュー活動を中心とした学習過程の中に、自己内対話を意識させる場面を設定した。指導の手立てとしては、仮想インタビューやストップモーション学習、相互評価を加味した自己評価の3つを柱に実践化を行った。その中で児童は、相手の言葉や話題についての自分の心の中の言葉を意識し、次につながる言葉や自己の態度について吟味する学習を進めていった。その結果、相手や目的を意識しながら対話の内容を広げたり深めたりすることで、対話活動を豊かにしようとする態度や技能が身に付いてきた。

<キーワード> 自己内対話(内言) 仮想インタビュー ストップモーション学習
相互評価を加味した自己評価

1 主題設定の理由

平成10年12月に告示された小学校学習指導要領では、国語科において、「適切に表現する能力」と「正確に理解する能力」の育成を基盤に、互いの立場や考えを尊重しながら言語で伝え合う能力の育成を重視して、「伝え合う力を高める」ことが位置付けられ、そのための教材開発や指導方法の改善が求められている。中でも「話すこと・聞くこと」に関する指導は、児童の日常の言語生活と密接につながっており、新たに領域が設定され、学年ごとの年間の指導時数が配当されたことからその重要性がうかがえる。

また、児童の日常会話の様子を見ると、気持ちを表現するにしても語彙が少なく限られた言葉だけだったり、相手の思いを感じ取るうにも集中して聞けなかったりなどといったケースに出会うことがある。このことから、「話すこと・聞くこと」、特に対話能力を核とした指導の必要性を感じる。

そこで、本研究では、児童が聞きたい、知りたいという思いをもてるようなインタビュー教材を開発するとともに、児童自身が自らの話し方や聞き方を見つめ、心の中のつづやきを意識し、その後の学習や主体的な対話活動につなげられるような学習過程や活動を工夫する。それらのことを通して、児童は一方的な発信や受信ではなく、互いの確かな認識に基づいた交流ができるようになり、対話能力が向上していくものと考え、本主題を設定した。

2 研究の目標

対話能力の向上を目指した音声言語指導の在り方を探る。

3 研究の仮説

学習意欲を喚起させるような単元の開発をするとともに、学習過程において次のような自己内対話(内言)を意識させる場を設定すれば、相手や目的に応じ、よく考えて話したり聞いたりする態度や技能が育つであろう。

仮想インタビューやストップモーション学習で、次の発言につながる自己内対話(内言)を意識させる。学習活動を振り返る場で、相互評価を加味した自己評価をさせる。

4 研究の内容と方法

インタビュー活動や自己内対話（内言）についての理論研究

ア インタビュー活動や自己内対話（内言）に関する文献等の先行研究や実践例の調査

イ インタビュー活動や話すこと・聞くことに関する態度面・技能面における児童の実態調査及び分析

ウ 自己内対話（内言）を意識したインタビュー活動についての指導方法及び教材の開発

仮説検証のための授業実践（対象学年：5年生）及びその分析と考察

5 研究の実際

(1) 対話能力育成における自己内対話（内言）指導の考え方

高橋俊三は、著書の中で「これからの音声言語の教育では、音声言語の能力として、内言の操作力を定着させていくことが重要である」⁽¹⁾と述べている。人は心の中の言葉にそのまま音声を付けて話しているのではなく、心に浮かんだ表象について自分の中のもう一人の自分と瞬時に対

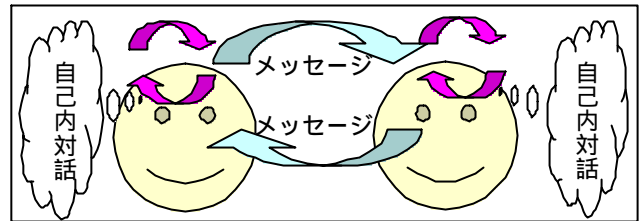


図1 対話の展開過程のイメージ

話をし、相手や目的に応じて適切な言葉を選びながら音声として表現していると言える。よって、意図的・計画的な指導を通して自己内対話（内言）を意識させることで、児童は、今自分が何をどんなふうに話したいかを自覚でき、思いや考えをより適切な言葉で表現できるようになるものと考えられる。そして、一人一人の自己内対話（内言）の力を高めることは、話をしている両者の対話能力を高めるとともに両者の間でやり取りされるメッセージの内容を広げたり深めたりするものと考えられる（図1）。

また、自己内対話（内言）は心の中の言葉であるため、それを児童に、ただ話しながら自覚させることは難しいと思われる。よって、それを自覚したり他人に向けて伝えたりするためには、話し言葉若しくは書き言葉として表す必要があるだろう。その場合、書き言葉で表す方が、より厳密で正確な思考につながると考える。大久保忠利は、「書くとは、このように、自分の考えを自分に見せるために大切な能力なのです」⁽²⁾と述べ、書くことが目に見えない自分の考えを自覚する上で有効であることを示している。各学習場面において、児童の心の中の言葉を文字化したり発表し合ったりする場を設定することで、自己内対話（内言）をより正確に意識させ、それを基に対話の内容を広げたり深めたりさせることを学習の柱として研究を進めたいと考える。

(2) 研究の全体構想

本研究では、「話すこと・聞くこと」の基礎となる学習形態の一つであるインタビュー活動を通して、児童自身が自己内対話（内言）を意識しながら話し言葉を補強・修正していく力を育てたいと考える。自己内対話（内言）を意識させる場面としては、仮想インタビュー、ストップモーション学習、相互評価を加味した自己評価の3つを設定したいと考えており、それらを組み合わせ、段階的に指導していくことで対話能力の向上を図りたいと考える（図2）。

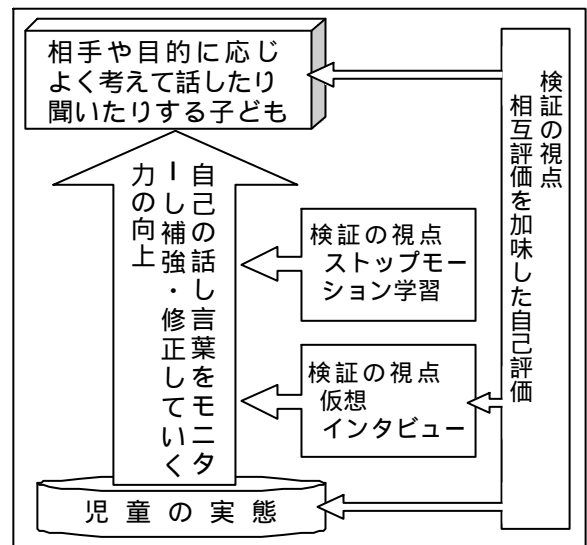


図2 研究の全体構想

(3) 指導計画（第5学年 単元名「友達再発見！クラスパンフレットを作ろう」 全10時間）

指導に当たって、まず、児童がどれ程の対話のやり取りができるかを把握するために、「友達が今がんばっていることや夢中になっていることを知り、クラスパンフレットを作ろう」と呼び掛け、模擬イ

インタビューを行った(表1)。そして、模擬インタビューで友達のことをしっかりと聞き出せていない事実に触れることで、友達のことをもっとよく知りたい、

表1 指導計画の概要

時数	主な学習内容
第1時	クラスパンフレット作りの見通しをもつ(模擬インタビュー)
第2・3時	仮想インタビューを基にしたインタビュー活動をする《検証授業1》
第4時	パンフレットの1次原稿を書く
第5・6時	ストップモーション学習によるインタビュー活動をする《検証授業2》
第7時	ストップモーション学習をまとめる
第8・9時	2次原稿のためのインタビューを行う 《検証授業3》
第10時	パンフレットの原稿を仕上げる

自分のがんばっている様子をもっとよく知ってほしいという意欲をもたせ、検証授業に取り組んだ。なお、授業の際には、児童に分かりやすいように「自己内対話(内言)」という言葉は、「心の言葉」と言い換えて用いた。

(4) 検証授業の実際

ア 検証授業1 仮想インタビューを基にしたインタビュー活動をする(2・3/10時間)

検証授業1では、イメージマップ作りを通して発想を広げさせながら、友達から聞き出せそうな質問の材料を選ばせ、それを基にインタビューの中身を予想する活動(仮想インタビュー)を行った。その後、仮想インタビューのメモを基に実際にインタビューを行い、模擬インタビューでの対話の様子と比較した。

その結果、1時目(模擬インタビュー)では質問項目の数が1人当たり7.2回であったのに対し、本時(仮想インタビューを経た後の実際のインタビュー)では12.5回と増加していた。その要因としては、児童が仮想インタビューを行ったことで、対話の流れを考えながら内容を広げたり、相手の答えを複数予想した上で、関連質問を考えたりできたからだと思われる。また、関連質問の数についても、1時目が1.8回、本時が2.6回と増加していた。さらに、1つの質問に対して相手の答えを複数予想した回数は、1人当たり3.5回であった。

M児の仮想インタビュー(表2)を見てみると、「そんなに続けて」「すごいですね」「()日もしているんですか」などのように「驚き・発見」や「確かめたい」といった気持ちを言葉にしている。そして、

表2 仮想インタビューの例(M児)

自分が話すこと	予想される答え
・始めたきっかけは、何ですか。	・自分で入りたいと言ったから。
・ <u>それで</u> 、何年ぐらいしているんですか。	・()くらい。
・ <u>そんなに続けてて</u> 、やめたいと思ったことはありますか。	・ 思いません
・ <u>すごいですね</u> 。ぼくは野球をやってて4回ぐらいはありますよ。	・ 思います。
・ <u>それでもやめないとはすごいですね</u> 。	・ そうなんだ。
・ <u>それでは</u> 、一週間で何曜日に練習しているんですか。	・ すごいでしょ。
・ <u>すごいですね</u> 。()日もしているんですか。	・ ()にしています。
・ <u>話は変わりますが</u> 、試合に勝ったときの気持ちは?	・ そうです。
・ <u>それで</u> 、バスケの目標は?	・ とてもうれしいです。
	・ ()です。 以下省略

実際のインタビューでも、それらの言葉を生かした話し方をしていた。このように、多様な「心の言葉」が音声となって多く表現されることが、対話能力の向上において大切であると考えられる。

太字 聞き出したい ~~~~~ 驚き・発見 ~~~~~ 確かめたい
 ===== 話題を進めたい ← 関連した質問へ
 - - - - - 相手の答えを複数予想() 詳しく予想できない答え

イ 検証授業2 ストップモーション学習によるインタビュー活動をする(5・6/10時間)

検証授業2では、インタビューの一つ一つのやり取りごとに時間を区切り、受け手の答えに対する「心の言葉」や次の質問を文字化し紹介し合うストップモーション学習を行った。同じことを質問する場合でも、人によって様々な考えや思いがあり、それによって次に「つなげる言葉」の言い回しも変わってくる。児童には次頁表3のような「心の言葉」と「つなげる言葉」の例を示し、学習の際

の参考とさせた。

表3 児童に示した「心の言葉」と「つなげる言葉」の例

心の言葉	
インタビューアー	驚き・発見 へえー, すごいな, おどろいたな, それはおもしろい など
	その通り(共感) うんうん, 私もそう思う, 分かるな, なるほど など
	確かめたい(確認) よく分からないな, こういうことかな, 本当かな など
	聞き出したい(疑問) だけれが, いつ, どこで, 何を, なぜ, どのように など
受け手	こんなことを聞いてほしいな, もう少し詳しく聞いてほしいな など
つなげる言葉	
対話活動を豊かにする言葉 (感想や考えを述べて質問)	がんばってください, すごいですね, は ですよ, 残念でしたね, それはよかったですね など
対話内容を深める質問 (詳しく聞いていく質問)	は何ですか, いつ ですか, したことはありますか, どのな ですか, と思ったことはありますか, どこで していますか, そんなに ですか など
対話を進める言葉 (次の話題に進む言葉)	まず, 最初に, 初めに, 次に, では次に, 今度は, では, それでは, それで, じゃあ, では逆に, 反対に, 最後に など

この班は、V児の答え1に対し、話合いの結果、「2年も続けてすごいですね。2年も続く理由は何ですか」という質問2の言葉を導き出している。これは、「すごいですね」という言葉で相手を褒めることで対話活動を豊かにしようと考えたり、「やめたいと思ったこと」よりも「2年間続けた理由」を質問することで、V児のがんばりをより引き出せそうと判断したりしたからだと思われる。

学習後の感想には、「いろいろな考え方が分かってよかった」などの記述があった。児童は、自分や友達の「心の言葉」を意識することを通して、人によって様々な「心の言葉」があり、そこからつながる質問の言葉も様々であることに

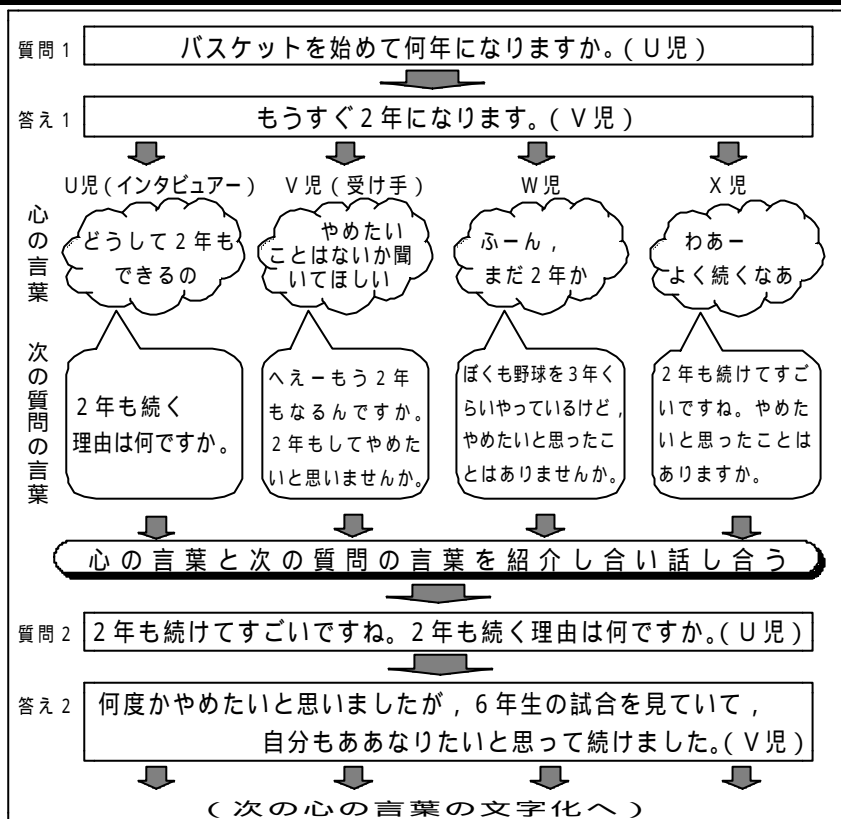


図3 ストップモーション学習の話合いの実際(6班)

気付いていったようだった。また、「質問するとき心が通じたような気がした」という記述もあり、言葉のやり取りだけでなく、心情面においても相手とのつながりを感じた児童がいたこともうかがえた。

ウ 検証授業3 2次原稿のためのインタビューを行う(8・9/10時間)

検証授業3を行う前に、ストップモーション学習で得られた音声やワークシートの記録を基に、児童と一緒に「心の言葉」と「つなげる言葉」の関係を整理する活動を行った(7/10時間)。そして、検証授業3では、それまでの学習を基に自己内対話を意識させながら、1対1によるインタビュー活動を行った。仮想インタビューやストップモーション学習で、「心の言葉」を意識し相手の気持ちや目的を考えながらインタビューを行った経験を思い出させ、相手の答えに対してまずどんなふうに感じて心の中にどんな言葉が浮かんだかを大切にしながら、友達の魅力をたくさん引き出そうと呼び掛けた。質問項目を見ずにインタビューすることで、児童には相手の答えをよく聞こうとする表情が見られた。インタビューの音声の記録を検証授業1のものと比べてみると、N児のインタビューのように、「驚き・発見」「その通り(共感)」

「確かめたい(確認)」「聞き出したい(疑問)」「話題を進めたい」といった様々な心の言葉に基づいたと思われる発言が、対話の中に加わっているものが多く見られた(表4)。これらのことから、相手の答えをよく聞いたり、よく考えながら対話を広げたり深めたり、あるいは、相手との関係を豊かにしたりしようとする意識が高まってきたことがうかがえる。その後、2次原稿を書かせたところ、仕上がった原稿は1

表4 N児のインタビュー(受け手M児:少年野球と犬の散歩について)
次原稿(4/10時間)に比べると、友達のがんばりに関して詳しく触れているものが増え、クラスパンフレットにふさわしいものとなった。児童が自己内対話を意識し自分の話し言葉をよく吟味しながら、「友達の魅力を引き出す」という目的から逸れることなくインタビューを行うことができたからだと思う。

インタビューア- (N児)	受け手 (M児)
・こんにちは。今日はM君ががんばっていることについて聞かせてもらいます。	・はい。
・最初に、野球でがんばっていることについて聞かせてください。	・はい。
・いつから始めたんですか。	・うーんと、2年生の1月ごろからです。
・始めたきっかけは何ですか。	・きっかけは、お父さんがテレビをつけていて、野球選手がカッコいいプレーをしていたから入りました。
・それは相当カッコ良かったんでしょうね。	・ボールをジャンプして捕ったり、横に跳びながら捕ったりしたのがカッコ良かったです。
・どんなところがカッコ良かったんですか。	・はい。
・それでは次に、今の目標はありますか。	・プロ野球選手になることです。
・それはどんなことですか。	・野球部全員です。
・それはすごい夢ですね。	・はい。
・じゃあライバルはいますか。	・はい。
・全員ですか。	・はい、します。
・全言を抜けるようにがんばってください。	・ファインプレーなどです。
・中学校でも野球をするんですか。	・ボールが落ちる寸前のところを、ヘッドスライディングで捕ったりするのです。
・中学校では特にどんなプレーをしたいですか。	・はい。
・ファインプレーとは何ですか。	以下省略
・大変そうなプレーですね。	

太字 聞き出したい 驚き・発見 確かめたい
 ----- その通り 話題を進めたい 関連した質問へ

(5) 検証授業の全体考察

ア インタビュー活動での話し言葉の変容

インタビュー活動の中で、児童が実際に使用した言葉の数をとらえることで対話の広がりや深まりの変容を見た。ここでは、模擬インタビュー(1回目)、仮想インタビューを生かしたインタビュー(2回目)、ストップモーション学習後のインタビュー(3回目)を比較している。表5に示すとおり、各インタビューの学習を重ねることで、「対話のやり取りの総数」が増加しており(1回目平均7.2 2回目平均12.6 3回目平均21.0)、徐々に対話に広がりが出てきたことが分かる。また、表6に示すとおり、2回目のインタビューで特に「聞き出したい(疑問)」と「話題を進めたい」が増加し、3回目で「驚き・発見」「その通り(共感)」「確かめたい(確認)」「話題を進めたい」において増加傾向が見られた。2回目のインタビューの際に「驚き・発見」「その通り(共感)」「確かめたい(確認)」といった言葉が出にくかったのは、児童が仮想インタビューのメモを見ながら話を進めたことで、予想した質問項目や話の筋を大切にすることはできたものの、新たにその場その場の心の言葉をうまく話し言葉として表現できなかったからではないかと思われる。それに対し、3回目のインタビューでは、対話をしながら即時的に自己内対話を行い次につながる言葉を考えていったので、相手の話をきちんと受けとめやすく、また、様々な種類の言葉を使って話題を広げたり深めたりすることができたのではないかと考える。表5の関連

表5 話し言葉の量的変容(1人当たりの数)

	1回目	2回目	3回目
質問項目の総数	7.1	12.2	16.0
関連質問の数	1.8	2.6	5.6
感想や考えを述べた数	0.04	0.46	5.0
対話のやり取りの総数	7.2	12.6	21.0

表6 インタビューで使用された言葉の種類と数

	1回目	2回目	3回目
驚き・発見	1	5	64
その通り(共感)	0	6	56
確かめたい(確認)	1	2	20
聞き出したい(疑問)	170	290	364
話題を進めたい	51	80	118

質問の数についても増加傾向（1回目平均1.8 2回目平均2.6 3回目平均5.6）が見られた。児童が自分の質問に対する相手の答えを切り口にして、対話をより深めようとしていったことがうかがえる。しかし、2回目のインタビューでは、数が減少している児童も見られた。これは、相手の答えによって事前に予想した言葉が使えない場合も出てきたからであると考えられる。相手の答えを予想した上で、更に臨機応変な対応ができるような指導が必要だと考える。

イ 相互評価を加味した自己評価の場面での自己内対話を通して

表7は、各インタビュー活動の後に自己評価を行い、その後ペアの友達からのアドバイスを受け、それを参考にして再度自分の対話の内容について振り返ったときの記述をまとめたものである。このような場を設定したことで、インタビュー活動における児童のめあてがより具体的になり、相手や目的に対する意識の高まりがうかがえた。また、自分の振り返りを文字として書き表したことは、今自分がどんなふうに話したり聞いたりしているかを自覚する上で、有効であったと考える。

表7 振り返りカードの内容の変容（自由記述欄より）

1 回 目	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し詳しく質問をしたい。(15人) ・そのことを聞いてみたい。(3人) ・分かりやすい順番で質問しよう。(3人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・話の内容がよかったと書いてあるからうれしい。(2人) ・相手が分かりやすいように質問しよう。(1人)
2 回 目	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し詳しく質問したい。(7人) ・分かりやすい順番で質問しよう。(4人) ・話の順番はよかったと思う。(4人) ・そのことを聞いてみたい。(3人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほめる言葉などを言うようにしよう。(2人) ・話の内容がよかったと書いてあるからうれしい。(2人) ・相手が分かりやすい質問をしよう。(1人) ・「では」などを使えばよかった。(1人)
3 回 目	<ul style="list-style-type: none"> ・もう少し詳しく質問をしたい。(5人) ・相手が分かりやすい質問をしよう。(5人) ・分かりやすい順番で質問しよう。(4人) ・そのことを聞いてみたい。(4人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ほめる言葉などを言うようにしよう。(3人) ・次に質問することをよく考えよう。(3人) ・心の言葉をいっぱい入れたい。(2人) ・もり上がるような話にしたい。(2人)

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

ア インタビューで今まで知らなかった友達の一面を知ることができたり、自分のことを更に知ってもらったりしたことで、児童一人一人の喜びへとつながっていった。

イ 仮想インタビューやストップモーション学習を通して、話の筋が逸れないように予想した言葉を補強・修正したり、相手の答えをよく聞きながら次につながる言葉を考えたりすることができるようになった。また、関連質問をしたり、感想や考えを述べたりすることで、対話の内容に広がりや深まりが見られるようになった。

ウ 自己内対話を意識したことで、その場その場の驚きや共感を即時的に話し言葉として表現する場面が増え、対話活動を豊かにしようとする意識がうかがえるようになった。

エ 相互評価を加味した自己評価を行うことで、児童は自分の話し言葉について、自己評価だけでは気付かなかった一面に気付き、こんなふうにインタビューをしようという意欲や、こんなことを聞けば対話がより広がったり深まったりするのではないかという考えにつなげることができてきた。

(2) 今後の課題

ア 児童の発達段階に応じた対話力育成のための系統的な指導計画の作成。

イ 自己内対話（内言）を意識する力を高めるための指導方法の工夫。

ウ 相手の反応から自分の話す内容や言い回しを調整していく力の育成。

エ 相手の話の内容や気持ちを的確にとらえるための聞く力の育成。

《引用文献》

- (1) 高橋 俊三編 『音声言語指導大事典』 1999年 明治図書 p.18
- (2) 大久保 忠利 『国語教育本質論』 1976年 一光社 p.226